

平成 27 年 オホーツク海海域におけるケガニ資源密度調査結果報告書

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構
稚内水産試験場・網走水産試験場

要 約

- ・ 平成 27 年の資源密度調査によるオホーツク海海域全体の甲長 7cm 以上の雄（平成 28 年度の漁獲対象資源）の資源量指数は前年の 0.82 倍で、その水準は中水準であった。
- ・ 甲長 8cm 以上の雄（獲り残し群）の資源量指数は、前年の 0.84 倍に減少した。
- ・ 甲長 7cm 台の雄（新規加入群）の資源量指数は、前年の 0.66 倍に減少した。
- ・ 甲長 7cm 未満の雄（平成 29 年度以降に漁獲対象となるケガニ）の資源量指数は、ほぼ前年並みであった。甲長 7cm 未満の雄の資源量指数が低迷していることから、今後の資源動向には引き続き注意が必要である。

1. 目的

オホーツク海海域に分布するケガニ資源の有効かつ持続的な利用を図るため、資源評価を行い、ABC（生物学的許容漁獲量）の算出および許容漁獲量設定のための基礎資料とする。

2. 調査の概要(図1)

平成 27 年のオホーツク海海域におけるケガニ資源密度調査は、宗谷海域（宗谷総合振興局管内）では4月28日～5月28日、網走海域（オホーツク総合振興局管内）では6月17日～7月3日に実施した。この調査では、全114調査点（宗谷海域46点、網走海域68点）において調査用カニ籠（2寸目）を50個ずつ設置してケガニを採集し、調査点ごとに採集尾数の計数と甲殻硬度（甲らの硬さ）や甲長などの測定を行った。

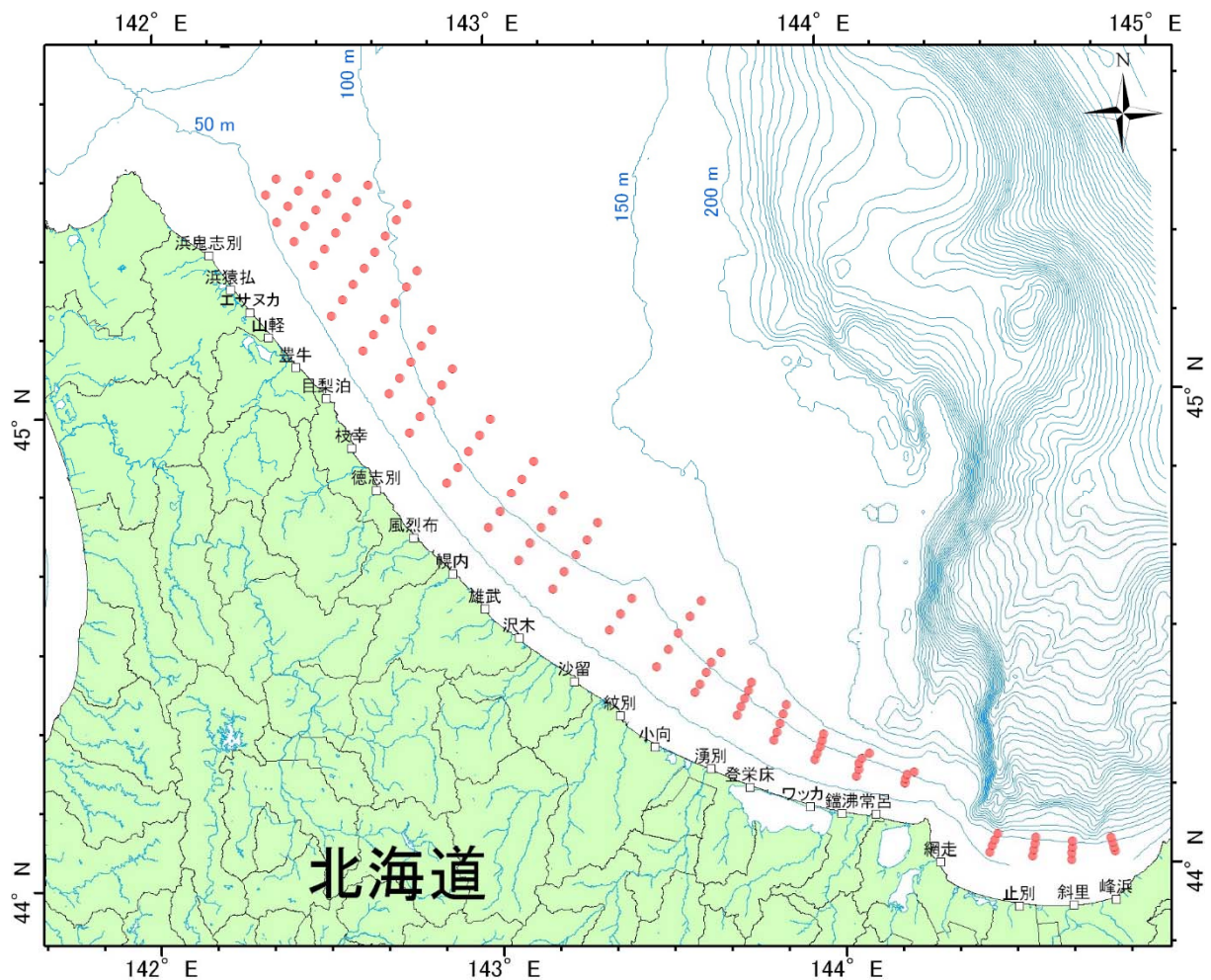


図1 オホーツク海におけるケガニ資源密度調査の調査点図

3. 甲長7cm以上の雄(翌年漁期の漁獲対象群)の資源量指数(図2、3)

甲長7cm以上の雄の資源量指数は、平成18年から平成21年まで減少傾向で推移し、平成21～23年に低水準となった後、平成24、25年に増加し中水準に回復した(図2)。しかし、平成26年には再び減少に転じ、平成27年の値は前年比0.82倍の17,097となった。ただし、その資源水準は前年に続き中水準であった。なお、資源水準の基準については、平成元年～平成20年(20年分)の資源密度調査における資源量指数の平均値を基に、平均値17,253×(0.6～1.4)の範囲を中水準、その上下を高水準と低水準とした。

甲長7cm以上の雄の資源量指数は、宗谷海域と網走海域で類似した変動傾向を示した(図3)。平成27年の両海域の値は宗谷海域で9,773(前年比0.93倍)、網走海域で7,324(同0.71倍)であった。

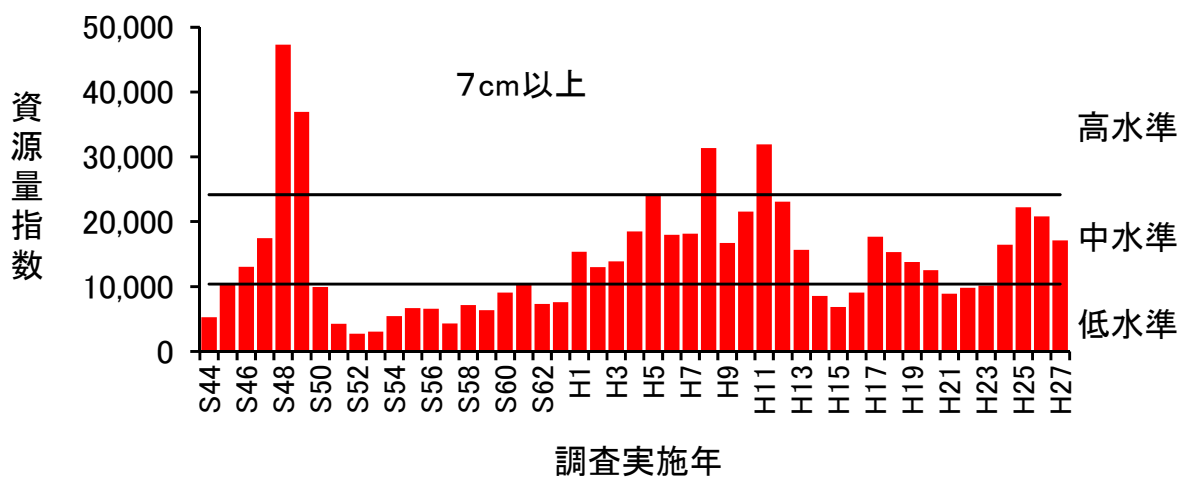


図2 資源密度調査における甲長7cm以上雄(翌年漁期の漁獲対象群)の資源量指数と資源水準

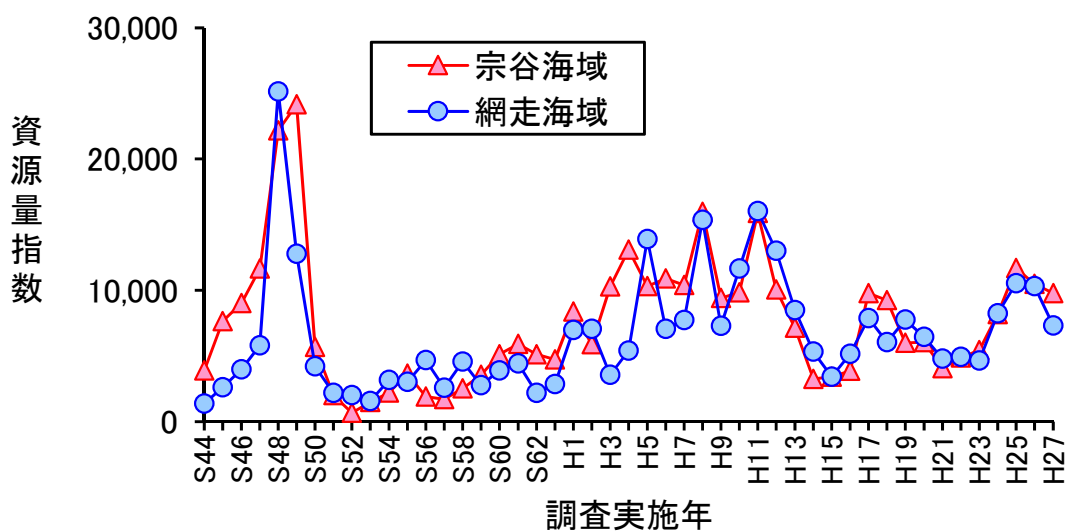


図3 資源密度調査における甲長7cm以上雄(翌年漁期の漁獲対象群)の海域別資源量指数の推移

4. 雄の甲長別資源量指数(図4)

(1) 甲長8cm 以上(獲り残し群)

8 cm 以上の資源量指数は平成 18～21 年に減少傾向、平成 22、23 年に横ばいで推移した後、平成 24～26 年に増加傾向であったが、平成 27 年には前年比 0.84 倍の 15,428 に減少した。

(2) 甲長7cm 台(新規加入群:翌年漁期に新たに漁獲対象となる群)

7 cm 台の資源量指数は平成 22 年から平成 25 年まで増加傾向であったが、平成 26 年に減少に転じ、平成 27 年の値は前年比 0.66 倍の 1,669 となった。

(3) 甲長7cm未満(翌々年漁期以降に漁獲対象となる群)

7 cm 未満の資源量指数は平成 18 年以降低い水準が続いた後、平成 24 年に大幅に増加したが、平成 25、26 年に減少し、平成 27 年の値もほぼ前年並みの 223 であった。7 cm 未満の資源量指数が低迷しているため、今後の資源動向には引き続き注意が必要である。

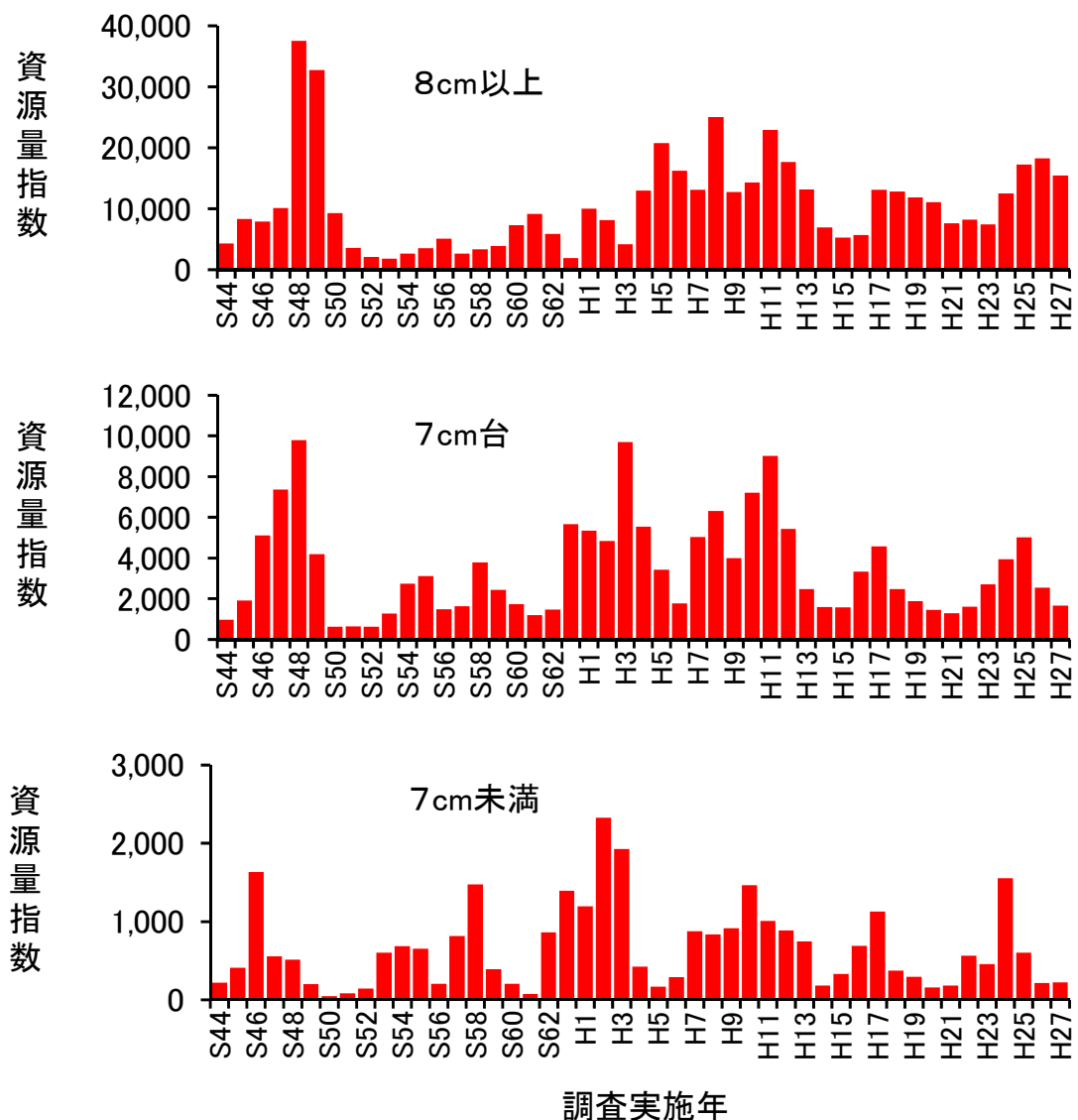


図4 資源密度調査における雄の甲長別資源量指数の推移

5. 甲長7cm以上の雄の海域別資源量指数(図5)

(1)宗谷北部海域(浜鬼志別沖～目梨泊沖): 平成19～23年に低い値で推移した後、平成24、25年に増加し、平成26年には減少したが、平成27年には前年比1.64倍の6,969に増加した。

(2)宗谷南部海域(枝幸沖～風烈布沖): 平成21年に1,795まで減少した後、平成22～25年には増加傾向で推移し、平成26年は前年並みであったが、平成27年の値は前年比0.45倍の2,804に減少した。

(3)網走西部海域(幌内沖～小向沖): 平成21～23年に低い値で推移した後、平成24～26年に増加したが、平成27年の値は前年比0.64倍の5,685に減少した。

(4)網走中部海域(湧別沖～常呂沖): 平成16～20年の値は1,500前後で推移したが、平成21年以降は1,100以下で低迷しており、平成27年の値は前年比0.75倍の456に減少した。

(5)網走東部海域(網走沖～峰浜沖): 平成13年から20年まで横ばい傾向で推移した後、平成21年から増加傾向となり、平成25年の値は昭和61年以降では最高値の1,789に達したが、平成26年は861に減少した。平成27年の値は前年比1.37倍の1,183に増加した。

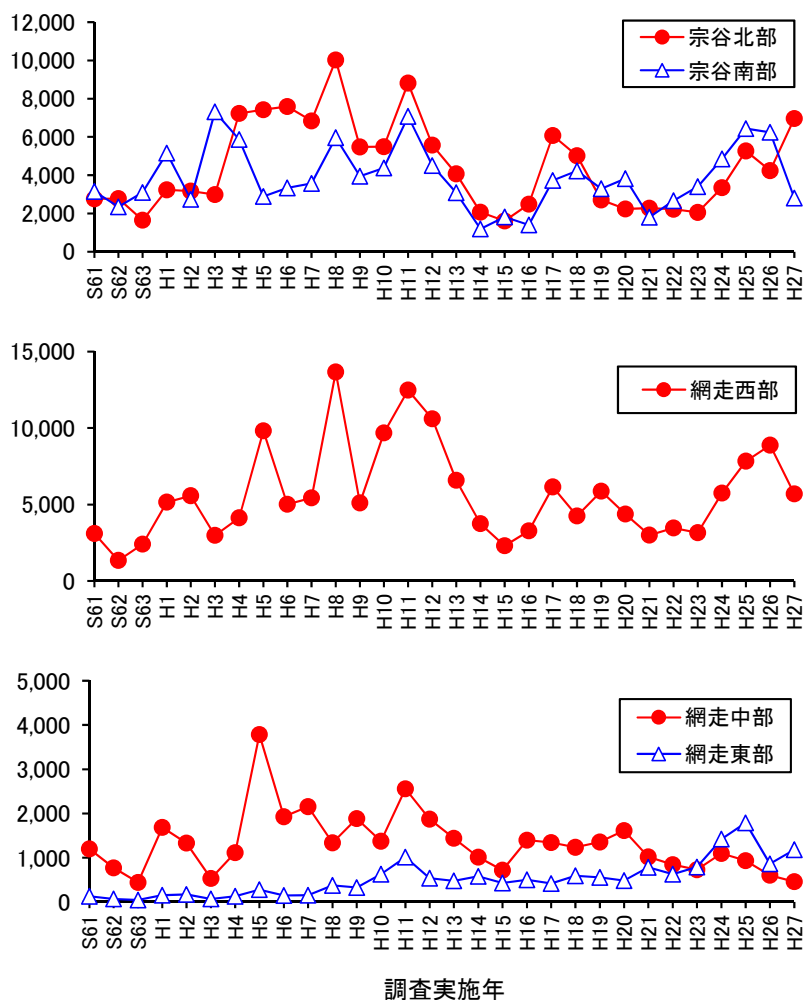


図5 資源密度調査における甲長7cm以上の雄(翌年漁期の漁獲対象群)の海域別資源量指数の推移

6. 調査点別 CPUE(100 かご当たり漁獲尾数)(図6)

平成 27 年の資源密度調査において、甲長 7 cm 以上の雄の CPUE が 500 尾/100 かごを超えたのは、全 115 調査点のうち 26 調査点（前年は 24 調査点）であった。CPUE が 500 尾/100 かごを超える調査点があった定線は、浜鬼志別～豊牛、風烈布、幌内、沢木、紋別、止別～峰浜であった。

平成 27 年の資源密度調査において、甲長 7 cm 未満の雄の CPUE が 100 尾/100 かごを超えたのは、全 115 調査点のうち 2 調査点（前年は 1 調査点）だけであった。CPUE が 100 尾/100 かごを超える調査点があった定線は、エサヌカと風烈布であった。

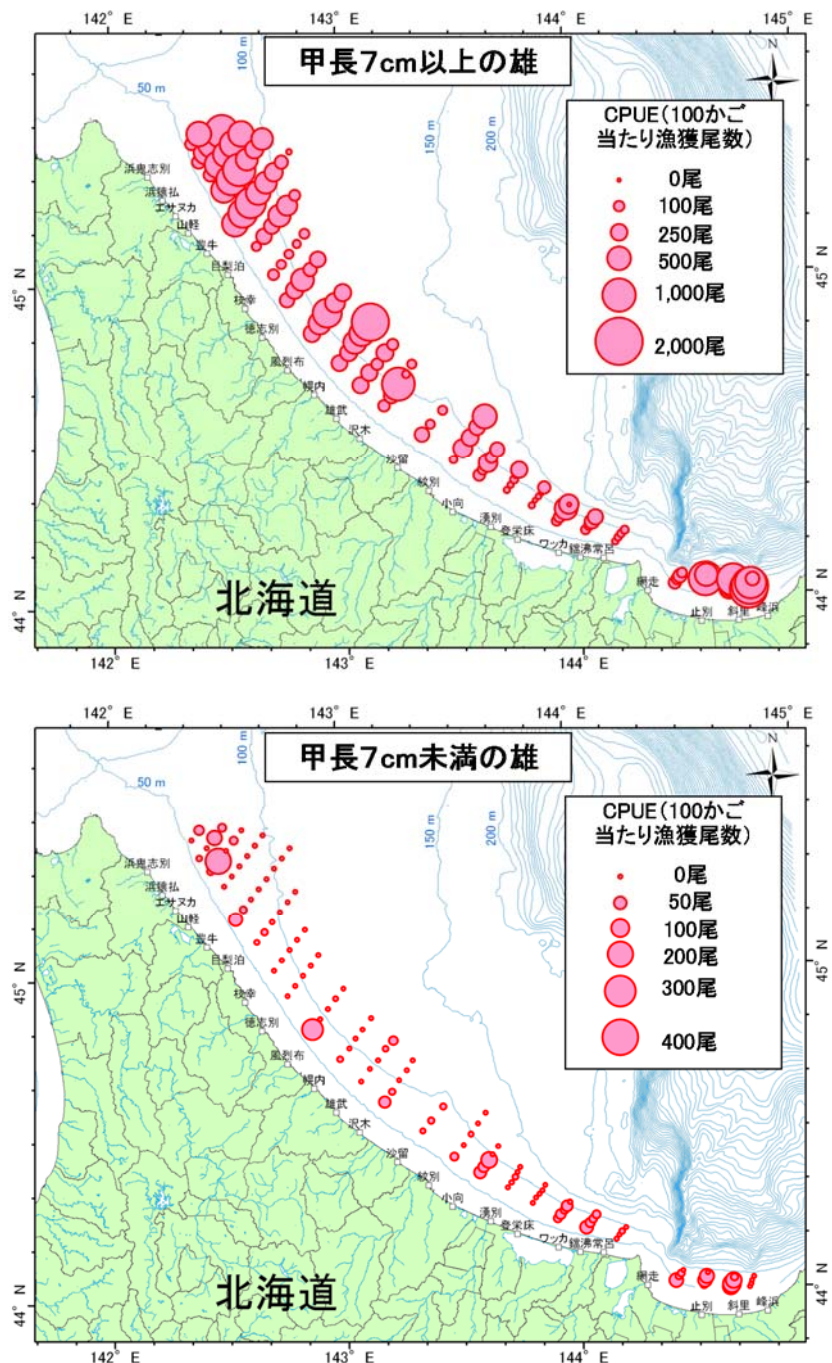


図6 平成 27 年の資源密度調査における雄の甲長7cm 以上(上図)と7cm 未満(下図)の調査点別の 100 かご当たり漁獲尾数